

瀬戸内晴美

色徳

下卷



色 徳 下巻 瀬戸内晴美

新潮社版

色 (しきとく) 徳 下巻

昭和49年 9 月15日 発行

昭和50年 1 月20日 3 刷

著 者 ^{せ と うち はる み} 瀬 戸 内 晴 美

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

〒162 東京都新宿区矢来町 71

電話 ^{業務03(266)5111} 編集03(266)5411 振替東京4-808

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 新 宿 加 藤 製 本

定価 880円

© Harumi Setouchi, Printed in Japan, 1974

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

德下卷
目次

昼　　万　　百　　乱　　鬼
の
虹　　緑　　合　　菊　　薊

125　　93　　61　　28　　7

空	辻	行	昨	杏
	公		日	の
華	園	雲	風	花

288	256	224	190	157
-----	-----	-----	-----	-----

装幀 高山辰雄
挿画 風間 完

色

德

下卷

鬼 薊

「ほんまのこと打ちあけてほしいのやけど、馬淵とあんたの関係はどうなつてはるのや」

六右衛門は君江の表情を見逃すまいとして相手の顔に大きな目を据えたまま訊く。

「こんな場所です、そんな話出来ると思つてはるの」

君江はまるで六右衛門と秘密の逢引の話でもしているようなまめかしい微笑を浮べていう。他人が見たら、その君江の微笑を見ただけで、現在の二人が恋仲か何かのように見られそうだった。

「話は簡単やおまへんか、あんたと馬淵がどうなつてゐるか訊いてるだけや、あんたのことやから、どうせ馬淵にも手がついてると思うけど、それが現在まだ進行形か、過去形かということが問題なんや」

「あなたはまた何で、そない桂子さんのこというたら血相変えて躍起にならりますの、そっちこそ桂子さんとういう間柄どすのやろ、六右衛門さまのことやもの、可愛がつたということは手がついてると思つてよろしいのかしら」

「阿呆な、何いうてはる。あの子はれっきとした生娘や、清浄無垢や」

「へえ、そない太鼓判押さはるとこみると、試さはったの」

「何いうてはる、冗談やおまへんで」

六右衛門はじりじりした。君江は六右衛門が苛々いきまけばいきまくほど、悠揚として顔が輝いて

くる。

「人がどう思うかしら、ね、あとで」

君江はいいながら、それこそ人が見たらどう思うかというような馴れ馴れしきで顔を六右衛門に近づけ、耳に囁いた。

「この会のあとで、『いねもと』で待ってるわ、話はあそこでね」

君江の全身からむせるような香水の匂いがした。アムバー系の香水しかつけない君江は、その香水を乳房と脇の下と、臍のまわりと茂みの中にすりこんでおく。『いねもと』の小鈴が、

「藤枝の奥さんが見えはったら、シーツにもお蒲団にも、えろう香水の匂いがしみこんでしまうてかないまへんわ。物凄うきつい匂いでっしゃろ、洗濯したかて上等の香水はとれしまへんのどっせ、うちは、藤枝の奥さん用のシーツと枕を別に用意してあるんどっせ」

とぐちをこぼしたことがある。もちろん、六右衛門との時だけ、君江が『いねもと』を利用してゐるわけではないのだ。最初は六右衛門がつれていったが、君江は天性の人なつこさで小鈴を十年の知己のように扱い、それからは、六右衛門以外との情事にも『いねもと』を使うようになってゐる。

一度などは、二つしかない、『いねもと』の客用の部屋のひとつに六右衛門と女がいたが、突然来たいといってきた君江は、小鈴が、それとなく、今日は先客に都合の悪い人が来ているからといったのに承知しない。

「都合の悪い人って誰？」

小鈴がいいよどんでいると、

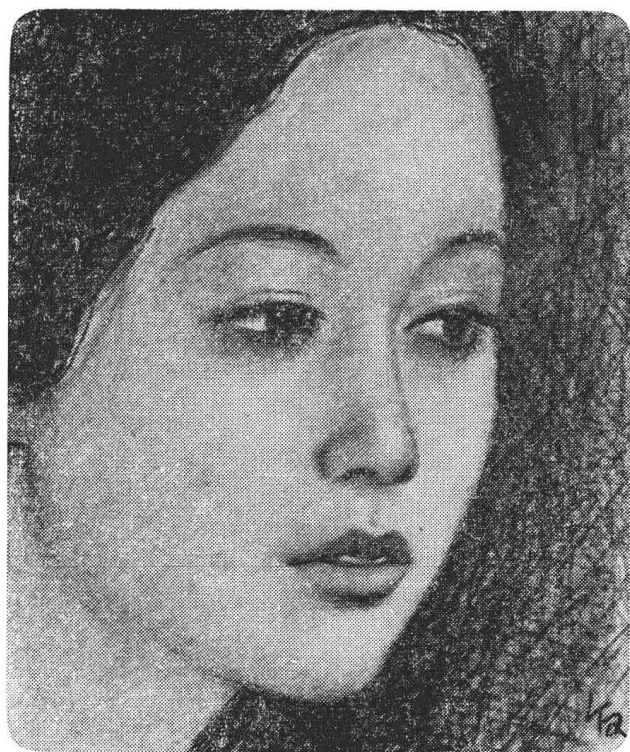
「ああ、六さまね、あの人なら大丈夫よ。こっちがだまっていればいいんだもの、万一逢ってしまったところで、お互いでしょう」

という。小鈴はこれだから素人はかなわないと思ったと、これも後で六右衛門に述べた。結局、

君江は、その頃の相手の大学のインド哲学の助教授をつれて、『いねもと』へ上った。

君江も閨では派手にとり外した声をあげるたちなので、階下で小鈴は、はらはらした。途中で六右衛門が便所に下りて来て、小鈴にいった。

「後から来た客、えろう賑やかやないか」



「へえ、そうのようどすなあ」

小鈴はおかしさをこらえて、六右衛門に番茶をいれてやった。

その日は互いに顔をあわさず何カ月かたって、二人でつれだつてきた時、君江の方からその時のことをい出したので、六右衛門も笑ってしまった。

「へえ、あれ、あんたやったのか。何や、聞いたことのある声やなあとは思ふたけど、壁ごしの声はやっぱり、ちょっと趣がちがいますなあ、それに、まさか、あんたが隣りに来てはるとは思いもよらへんさかい」
「あたしの方は、隣りにあなたがいると思うと、かえって興奮して、どうしようもなかったわ」

君江はそんなことも平気でいい、それが不思議にさらりと聞き流せる爽やかさも持っている。六右衛門は小鈴に、

「あの人は女やけど、男みたいに自由で解放されてるところがおまっせ、そこが僕らには並の女にな

い魅力を感じるのや」

と打ちあけたこともある。かといって、君江とは、恋とか愛とかいう情緒はおこらず、情事を気の利いたゲームのように愉しむ相手に最適だともいうのだった。

形式的な披露宴の間じゅう、六右衛門はじりじりしながら時間の経つのを待っていた。

来賓のテーブルスピーチも一通り終り、後は新郎新婦の友人たちにスピーチが廻りはじめた頃、六右衛門は席をたって、真直ぐ『いねもと』へ出かけた。わざと、立ちぎわには君江の席には目もくれなかったが、君江が六右衛門の立ち去るのを見逃す筈はないと思っていた。

『いねもと』について、一時間ばかりうとうとしていると、君江の訪れた華やかな声で目を覚ました。「ああら、もう寝巻になってはるの、紋付袴と色留袖でいっぺんしてみたいと愉しみにして来たのに、ね、もう一度着物つけてよ、お願い」

宴席でシャンペンや、日本酒や葡萄酒のチャンポンをしたせい、君江はもう相当酔っていて、目のまわりを染めている。

お茶を運んできた小鈴をつかまえて、君江は臆面もなくいう。

「ねえ、女将さん、あなたはまだ先斗町に出てた頃子供だったからそんなことしなかったでしょうけど、旦那さんは遊びはったお人やから、孔雀もしたでしょうね」

「へえ、そら、そんなこともおしたなあ」

晴着を汚すまいと正月、床の間を枕の男に、女は着物の裾を翹のように押しひらいてかぶさっている。色町では孔雀といえ、正月の行事のひとつのように思われている。

「六さまに着物させさせてよ。あたしひとりが翅をひろげても感じが出ないでしょう」

小鈴は笑ってとりあわない。君江の好きなブランドを枕許に置き、さっさとひき下ってしまった。
「今日は何もじゃらじゃらしにここへ来たんとちがいませ、早う水でも茶でものんでしつかりしておくれやす」

六右衛門は苦虫を噛みつぶしたような顔でいう。

「酔いをさますには、お水やお茶より、もっと即効薬がありますやろ、久しぶりやのに、何でそないとげとげしてはりますの」

君江がこうなっているのは、決して目的をとげないでは男を放さないと承知している六右衛門は観念した。

衣裳好みの君江が金にあかして選んだ帯も着物も宝石のような値打だった。女を鎧っているものが高価で豪華なほど、それをほぎとる男の方は征服欲が満足させられる。夜盗や強盗の心境もこうかとばかり、六右衛門は次第に君江に挑発されて高ぶっていった。

「昔なじみってやっぱり安心ね、久しぶりだと、はじめはぎくしゃくするけどすぐしっくりいく。不思議に、軀が覚えてるわね」

君江は今日の会のための厚化粧が汗で乱れ、鼻のまわりが脂で光る顔を六右衛門にむけ満足そうにいう。

自分はブランドを腹這いになってのみ、六右衛門には煙草に火をつけて手渡してやり、じらすようにいった。

「桂子さんとほんととはあったんでしょ」

「何を阿呆なこと、あの人は僕が子供の時から可愛がって誰にも指一本ささせんようにしてきた人や、ここ数年逢うてへなんだけど、あの子はほんまに生娘やで」

「そんなにむきになるところがあなたらしくないけど、まあ、そういうことにしておきましょう」

「あんた、まだ馬淵とつづいてる仲やったら、その男にあんな清純な娘をくつつけるような、そんなむごいことやめといてやってくれ」

「ほんとはね」

君江は面白そうに六右衛門の顔を見下ろしながら、ブランデーの匂いのする口を近づけてきて囁く。
「宏さんとはたしかにありましたよ。でもそれは一年も前のことで、今はきれいさっぱりよ。あたしがそう長つづきするたちでないのは知ってはるやないの」

「ふむ」

六右衛門はまだ疑惑はとけないが、やや安心した表情をして君江の顔を見直した。

「そんなこととしない宏さんのおかあさんに頼みこまれて、お嫁さん探しをしたわけ、そうしたら、あんないいお嬢さんがいたのよ。両方の家に喜ばれて、結構な縁組なの、頼むから、妙な気おこして、せつかくの縁談の邪魔せんといてほしいわ」

君江にそうさつくばらんに出られては六右衛門もいいかえすことばがない。

「宏さんはあんないい男前やし、金はあるし、祇園にも先斗町にも女がいて、それは大変やったの、それもこれも、全部、こんどの縁談のため、きれいに手を切ったくらい熱の入れようだから、わかつてやってほしいの」

「そんなら、いうこともないけど」

六右衛門は何故、そこまで打ちあけられても、釈然としないのか、われながら不思議に思いながら煙の行方を目で追った。

桂子と宏一の婚礼は予定通り華々しくあげられた。

当日、桂子は白無垢の花嫁衣裳に身を包み、色直しは三度もした。結納金がそれくらいにしなければ

ばならないほど出たのだと噂されていた。

君江は未亡人だから、男の仲人には、宏一の仕事関係の大会社の社長に並んでもらった。君江は黒留袖にも意匠をこらし、天人と羽衣を染めと刺繍で豪華に描いたものを身にまとい、金屏風の前に立ち並んだ新郎新婦と仲人に挨拶をして披露宴の会場に入る時、客の誰もが、花嫁の清純さに目を見はると同時に、仲人の君江の花嫁に負けない厚化粧と、留袖の見事に目を奪われた。

「まるで藤枝はんの婚礼みたいやないか」

六右衛門はつきあいのない客の二人がひそひそ囁きあうのを耳ざとく聞きつけた。

「案外そんなつもりやないのか」

相手も声をひそめて答えている。

「ほんまは、宏一さんのおかあはんには、二人の仲がばれて、乗りこんでこられたので、藤枝はんが一世一代の芝居をして、実は宏一さんには惚れてる娘はんがいるというて、桂子さんの名をあげたんやそうな」

「やっぱりさよか」

「それで宏一はんのおかあはんはああいうしっかり者やろ、藤枝はんの言質とらえて、そんならこの話まとめておくれやすと、責任もたせてしもたらしいわ」

「なるほどなあ、ええ勝負や」

やっぱりそうかと、六右衛門は齒がみしそうに口惜しがったが、今となつては後の祭りだった。

何も知らない桂子が、能面のように白く塗りあげた顔にせいっぱいの緊張をかくして、人形のようになり立ちつくしているのがあわれでならない。こんなことなら、いっそ、蓄の桂子を自分の手でつみとって、生涯保護してやるのだったと後悔が先にたつた。

その晩、夫婦はホテルで一泊して、翌朝早く、東京から北海道まで新婚旅行に発つという。

六右衛門は色直しの三度めをした桂子が、ようやく気分も落ちついてきたのか、はじめて、六右衛門の横を通る時、六右衛門に気づき、ふっと、かすかに目だけで微笑した時、思わず涙が出そうになった。

何も知らずに、可哀そうに。居たたまれない思いがした。花嫁の手をひいて平然と歩いている君江を見ると、怒りがこみあげてくる。

一年もてばいい方だと、六右衛門はこの結婚の行末を占った。

六右衛門の予感に適中して、桂子が早くも里に帰ったという噂が耳に入ったのは、あの華やかな婚礼の日から、わずか三カ月がたつたたない時だった。

早速君江に電話をかけてみたが、六右衛門の知らない新しい女中が電話口に出て、君江は旅行中で留守だという。行先を訊いても、わからないの一点張りだった。

桂子の家に電話をかけると、豊が電話に出て、もう、六右衛門の声を聞くなり涙声になった。

「噂は聞きましてん、そいで桂子ちゃん、どないしてはります」

「へえ、もう、何からお話してよいやら、桂子はんまり可哀そうやし、うちにいるのはかなわんいますので、知りあいのお寺にあずけてあります」

「京都でっか」

「いえ……」

「僕とお宅の仲やおまへんか、かくさず教えとくなはれ、僕はもう、桂子ちゃんが可哀そうで居ても立ってもいられしまへんのや」

「奈良の方どす」

六右衛門はそれだけ聞くと、電話ではもどかしいと、すぐその足で豊を訪ねていった。桂子が夫と君江の仲に気づいたのは、新婚旅行の時からだったという。